

主 題

中学校国語科における段落の構成や内容を検討して論理的な文章を書く力の育成  
— 「思考ツール」と「帰納論理に基づく5段落構成の型」の効果的な活用を通して —

校種及び研修教科・領域等 中学校国語科

神埼市立千代田中学校 教諭 阪口 真悟

概要

本実践は、国語科における「書くこと」の領域において、段落の構成や内容を検討して論理的に自分の考えを書くことができる生徒を育成するために、「思考ツール」と「帰納論理に基づく型」の効果的な活用の在り方を探ったものである。単元の中で、自分の考えや、自分の考えの根拠となる体験などの情報を、思考ツールを活用して整理する活動を行った。さらに、帰納論理に基づく5段落構成の型を活用して段落の構成や内容を検討する活動を行った。検証の結果、これらの手立てにより、論理的な文章を書く力を身に付けた生徒が増えた。

<キーワード> ・論理的な文章 ・思考ツール ・帰納論理に基づく5段落構成の型

Ⅰ 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（以下、学習指導要領解説）では、[知識及び技能]に「情報の扱い方に関する事項」が新設されており、「情報と情報との関係」や「情報の整理」に関して述べられている。そこでは、「原因と結果」や「意見と根拠」、「具体と抽象」など、情報と情報との関係などについて理解することが求められている。この点について、長谷川祥子は「『情報の扱い方』では論理的思考力の育成を目指していると理解することができる<sup>(1)</sup>と述べている。さらに、「現在は高度情報化が著しく伸長していて、これは人類社会で初めての経験である。膨大な情報から自分に必要な情報を的確に取り出し、判断した後、行動に移すには、論理的思考力が益々必要である<sup>(2)</sup>とあり、国語科において、論理的思考力を育成することの必要性を述べている。

令和3年度の佐賀県小・中学校学習状況調査（以下、県調査）の結果において、所属校の「書くこと」の領域における「伝えたいことが分かりやすく伝わるように、文章の構成や展開を考える」趣旨の設問の正答率は、県の正答率を下回っていた。文章の構成や展開に関連して、高木展郎は「論理的な文章には、読み手にわかりやすく、かつ説得力のあることが求められる。そのためには、論旨の展開が明確でなければならないので、文章の論理の展開を整理することが重要になってくる<sup>(3)</sup>と述べている。以上のことから、所属校の生徒は、論理的な文章を書くことに課題があると言えるだろう。所属校の3年生（86人）を対象に事前アンケートを行ったところ、「論理の展開を工夫し、多様な読み手を説得できるような文章を書くことができる」という質問に対して、「どちらかといえば、あてはまらない」「あてはまらない」と答えた生徒の割合は67.4%であった。さらに、試案授業で3年生（87人）に意見文を書かせたところ、約6割の生徒が段落を分けずに文章を書き終えていた。県調査の結果と、事前アンケートや試案授業の結果を併せると、所属校の生徒は自分の考えを読み手に分かりやすく伝わるように、文章を内容ごとに区切った「段落」の構成や展開を考えて論理的な文章を書くことを苦手としていると考えられる。

そこで本実践では、文章の構成や展開を考えて論理的な文章を書く力を養うために、生徒が題材に対する自分の考えや、自分の考えの根拠などを可視化して整理し、段落の構成や内容を検討する活動を設定する必要があるのではないかと考えた。このような活動を設定することが、段落の構成や内容を検討し、自分の考えを読み手に分かりやすく伝える論理的な文章を書く力を身に付けさせることにつながる

と考え、本主題を設定した。

## 2 目標

「書くこと」の領域において、段落の構成や内容を検討して論理的に自分の考えを書くことができる生徒を育成するために、「思考ツール」と「帰納論理に基づく型」の効果的な活用の在り方を探る。

## 3 仮説

中学校3年生の「書くこと」の領域において、情報を収集したり内容を検討したりする段階で、思考ツールを用いて「自分の考え」「自分の考えの根拠となる体験」「体験の共通点」を具体的、抽象的に書き出して整理する活動を行い、文章の構成や内容を検討する段階で、帰納論理に基づく5段落構成の型を用いて段落の構成や内容を検討することができるようにすれば、段落の構成や内容を検討して自分の考えを読み手に分かりやすく伝える論理的な文章を書くことができるようになるであろう。

## 4 手順

- (1) 思考ツールと、帰納論理に基づく5段落構成の活用に関する理論研究や、生徒の「書くこと」に関する実態を把握するための事前アンケートの調査や試案授業を行う。
- (2) 第3学年の「情報を読み取って文章を書こう ～グラフを基に小論文を書く～(光村図書「国語3」)」(3時間)の単元において検証授業を行う。
- (3) 事後アンケートの調査結果、ワークシート(思考ツール、型)、作品(意見文、小論文)を分析することで検証する。

## 5 内容

- (1) 文献等による理論研究について

学習指導要領解説の各学年の目標(2)では、「思考力、判断力、表現力等」に関して、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養うことが示されている。ここでの「思考力や想像力を養う」ことについて、富山哲也は「言語を手掛かりとしながら論理的に思考する力や豊かに想像する力を養うことである」<sup>(4)</sup>と述べている。また、学習指導要領解説の「思考力、判断力、表現力等」に関する目標においても、考える力については、第1学年では、筋道立てて考える力、第2学年及び第3学年では、論理的に考える力の育成に重点が置かれている。これらのことから、国語科の授業では、生徒に論理的な思考力を身に付けさせるための学習活動が求められていることが分かる。

「論理的」について波頭亮は「『論理的』であるとは、『話(議論/文章)が論理構造を備えていて、根拠から主張を導出するプロセスの納得性が高いこと』である。つまり、話を聞く人/読む人が明快に理解することができ、納得感を持って受容できるような思考の道筋、すなわち論理によって根拠から主張が導かれている場合に、その話は『論理的である』ということになる」<sup>(5)</sup>と述べている。また、井上尚美は「子どもは毎日の生活の場でいろいろな思考を働かせているのであり、無自覚ではあっても、論理を使っているのである。思考指導の目指すものは、そうした論理を顕在化させ、意識化させることである」<sup>(6)</sup>と述べている。以上のことから、論理的な思考力を身に付けさせるためには、思考を視覚的に認知させ、根拠から主張を導出する思考の筋道を理解させるような学習活動の充実が必要であると考えられる。

生徒の思考を視覚的に認知させる、つまり、思考を可視化する手立てとして「思考ツール」がある。田村学は「思考ツールには2つの特性がある」<sup>(7)</sup>と述べている。特性の一つ目は、情報の可視化である。自分の考えや自分の考えを支える根拠となる情報を思考ツールに書き表すことによって、情報を可視化することができる。二つ目は、情報の操作化である。可視化された情報を動かしたり修正したりしやすい状況が生まれることにより、生徒にとって活動しやすい状況となると述べている。また、思考ツールについて、黒上晴夫は、「図形が教えてくれるとおりに書き込んでいくことで、整理しやす

くなったり後で使いやすくなったりする」<sup>(8)</sup>と述べているように、思考ツールを用いる価値を示している。

論理的な文章について、市毛勝雄は「論理的な文章とは、いくつかの客観的な事実を根拠として一般性のある高次の判断を推論するという、帰納論理の骨組みを持った文章とすることができる。記録・報告・説明・論説等はすべてこの帰納論理の性質を持っている」<sup>(9)</sup>と述べている。また、長谷川も「生徒に書かせる論理的な文章とは現実を対象にし、そこから筆者の考えを基に事実を複数取り出し、その事実から考察や結論を導く過程を表現した文章のことである。」<sup>(10)</sup>と述べている。このような帰納論理の考え方を基に市毛が提唱している論理的な文章構成が「はじめ・なか1・なか2・まとめ・おすび」の5段落構成である。本実践では、この帰納論理に基づいた5段落構成の考え方を、論理的な文章の型として用いる。

## (2) 具体的な手立てについて

本実践の全体図は図1のとおりである。その中で、論理的な文章を書く力を育成するための手立てとして、「思考ツール」と帰納論理に基づいた論理的な文章の「型」を活用する。以下に、二つの手立ての具体的な内容を示す。

### ア 思考ツールの活用

「書くこと」について、学習指導要領解説に示されている学習過程は、次のようになっている。「題材の設定、情報の収集、内容の検討」「構成の検討」「考えの形成、記述」「推敲」

「共有」である。本実践では主に「題材の設定、情報の収集、内容の検討」及び「考えの形成、記述」の場面で思考ツールを活用する。思考ツールを活用して、自分の考えや自分の考えの根拠となる体験などの情報を書き出して可視化することで、考える方向性を見通したり、考えるための情報をそろえたりすることができる。また、思考ツールの種類によっては、情報を具体的に書いたり、抽象的にまとめたりすることができる。活用する思考ツールの例として、「ピラミッドチャート」がある。「ピラミッドチャート」は、集めた情報を抽象化して、主張へと導くことができるツールである。思考ツールは複数あるので、目的に応じて使い分けることによって、生徒自身が思考を可視化することができ、思考ツール内で必要な情報を整理することができるようになると考えられる。

### イ 5段落構成の型の活用

本実践では、「自分の考えを読み手に分かりやすく伝える論理的な文章」を学習指導要領解説、波頭及び市毛の考え方を基に、「結論や主張を導くために、段落の構成や内容が『原因と結果』、『意見と根拠』、『具体と抽象』、『比較や分類、関係付け』、『信頼性のある情報』などを基に整理されており、読み手が書き手の主張（結論）を明快に理解することができるような、首尾に一貫性のある文章」と定義する。論理的な文章を書かせる手立てとして、構成を検討する段階で、帰納論理に基づく5段落構成の型を活用する。この型に関しては、市毛の5段落構成「はじめ・なか1・なか2・まとめ・おすび」を生徒の既習事項に置き換え、「序論・本論1・本論2・考察・結論」とする。それぞれの段落に書かせる内容は図2に示す。「考察」という語句については、説明的文章等でも使われるが、本実践での「考察」は、具体的に書かれた本論1、2の共通点を抽象的に示すことで、文章に説得力をもたせるためのものとして取り扱うこととする。

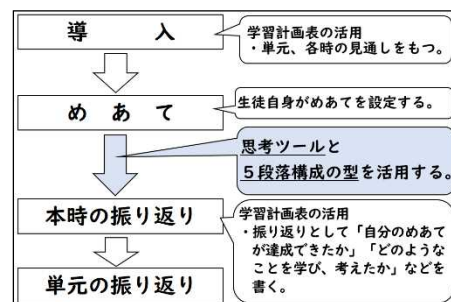


図1 本実践の全体図



図2 5段落構成の説明

## 6 検証の視点

- (1) 【検証の視点Ⅰ】思考ツールを活用することは、自分の考えや自分の考えの根拠となる体験、体験の共通点などの情報を整理するための手立てとして有効であったか。
- (2) 【検証の視点Ⅱ】帰納論理に基づく5段落構成の型を活用することは、段落の構成や内容を検討して論理的な文章を書くための手立てとして有効であったか。
- (3) 【検証の視点Ⅲ】段落の構成や内容を検討して、論理的な文章を書くことができたか。

## 7 授業実践及び考察

### (1) 授業の位置付け

第3学年において、検証授業後期では「情報を読み取って文章を書こう ～グラフを基に小論文を書く～」の単元で3時間の授業を行った。ここでは、主に検証授業の2時間目について述べていく。

### (2) 授業の実際

ア 単元名 「情報を読み取って文章を書こう ～グラフを基に小論文を書く～」

小論文のテーマ 「今後自分はどのように読書と関わっていくか」

イ 本時の目標 情報を具体的・抽象的に整理し、文章の構成や内容を考えよう。

ウ 授業記録

検証授業後期で実施した単元について、2時間目の学習活動を中心に、思考ツールを用いて情報を整理する段階から、5段落構成の型を用いて段落の構成や内容を検討する段階までの流れを以下に示す。1、3時間目においては、導入と終末は省略して示す。

時	検証の視点	学習活動
1		<p>1 図3右上のグラフから読み取れることを書く。</p> <p>2 1の理由を考えて書く。</p> <p>3 小論文のテーマに対する自分の考えを書く。</p> <p>4 3の根拠となる体験を考える。</p> <p>※ 次時の予習課題として、自分の考えの根拠となる「わたしの読書体験」を二つ以上書くことにした(図3左上)。</p>

今後読書とどう関わっていくか(結論)

人が最も読書すべき時期はいつ頃だと考えるか

9代以下	18.8
10代	40.7
20代	8.7
30代	2.1
40代	1.0
50代	1.3
60歳以上	1.5
年齢に関係なくいつでも	21.8
特にそういう時期はない	3.3
分からない	0.9

「平成30年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」  
(文化庁)から

⑤	④	③	②	①	段落の構成・内容の検討(見)
結論	考察	本論2	本論1	序論	
自分の考え	の本論と関連点2	読書体験や読書体験を2選んでその理由を	読書体験や読書体験を1選んでその理由を	読書体験や読書体験を1選んでその理由を	
		具体的内容	キーワード	具体的内容	

自分の考え

グラフの理由分析

グラフから読み取れること

図3 1時間目の説明資料

2	I	<p>1 前時を振り返り、学習計画表を基に本時の学習の見通しをもつ。</p> <p>2 自分のめあてを記入する。</p> <p>3 図3左上の思考ツール(ピラミッドチャート)を活用して情報を整理する。</p> <p>(1) ピラミッドチャートの説明を聞く(図4)。</p> <p>(2) 図3右下の自分の考えをピラミッドチャートに書く。</p> <p>(3) 自分の考えの根拠となる「わたしの読書体験」を確認する。</p> <p>(4) 根拠となる体験の中から二つ選び、その体験の共通点をピラミッドチャートに書く。</p> <p>(5) 近くの生徒と意見の交流を行い、ピラミッドチャートの一貫性を確認し合う。</p>
---	---	--

★ポイント

独自の体験・見聞を根拠とすること

いつ、どこで、だれが(何が)、何ぞ、どのように(何が)など

※ 過去形または現在進行形の文になる!

今後読書とどう関わっていくか(結論)

★ポイント

根拠となる体験・見聞に共通する感想や意見を書く

(例) わたしにとって読書は〇〇だどと考えることが言える。など

図4 ピラミッドチャートの説明



3	II	<p>4 5段落構成の型を活用して、段落の構成や内容を検討する。</p> <p>(1) グラフから読み取れることを序論として書く(図5)。</p> <p>(2) 思考ツール(ピラミッドチャート)を基に、結論、考察、本論1、本論2を書く(図5)。本論については、本論の要旨を表すキーワードを書き、その後に具体的内容を書く。</p> <p>5 本時で学習したことを振り返る。</p> <p>6 次時の見通しをもつ。</p>	
	III	<p>1 型に書いたことを見直し、必要に応じて加筆修正する。</p> <p>2 小論文を書く。</p>	<p>図5 ピラミッドチャートと型の関連</p>

(3) 考察

検証授業後期の分析に関しては、単元3時間全ての授業に参加した生徒26人を分析対象とする。生徒の変容を述べるに当たり、生徒が記入したワークシート(思考ツール、型)や作品(小論文)を基に、生徒を4つのグループに分類した(資料1)。また、学習過程の中で変容が見られたイ、ウ、エのグループの学習の様子を述べるために、検証授業後期における授業中の様子やワークシート等を参考に、生徒を抽出した。資料2に抽出生徒のプロフィールを示す。検証においては、抽出生徒と、授業を行ったクラス全体(26人)で行った。

アのグループ	イのグループ	ウのグループ	エのグループ
思考ツール、型の両方に必要な情報を全て書くことができている生徒。小論文においても、5段落構成に基づいて書くことができる生徒。	思考ツール又は型において、いずれかに内容不十分な箇所があるが、小論文においては5段落構成に基づいて書くことができる生徒。	思考ツール又は型において、内容不十分である箇所が複数あるが、小論文においては5段落構成に基づいて書くことができる生徒。	思考ツール又は型において、内容不十分な箇所があり、小論文においてもいずれかの段落の内容が不十分であり、5段落構成で書くことができていない生徒。

資料1 書く活動における生徒の実態によるグループの分類

生徒L (イのグループ)	生徒M (ウのグループ)	生徒N (エのグループ)
学習への見通しをもつことができれば、基本的には自分で書き進めることができ、最小限の助言で考えや記述内容を修正することができる生徒。	学習に対する意欲はあるが、授業の進捗についていくことができないことがあり、級友や教師の支援を受けることがある生徒。	自分の考えをまとめて話したり書いたりすることを苦手としており、全体の指示の後に個別に対応することが多い生徒。

資料2 抽出生徒のプロフィール

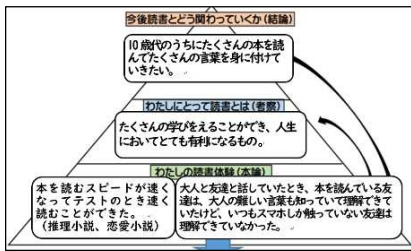
ア 【検証の視点I】思考ツールを活用することは、自分の考えや自分の考えの根拠となる体験、体験の共通点などの情報を整理するための手立てとして有効であったか。

本実践では、思考ツールを活用して、自分の考えや根拠などの情報を整理することが、具体と抽象などの情報と情報との関係について理解を深めることにつながると捉え、検証する。思考ツール(ピラミッドチャート)の活用については、自分の考えや、自分の考えの根拠となる具体的な体験を書いており、具体的な体験の共通点を抽象化してまとめているかを分析した。

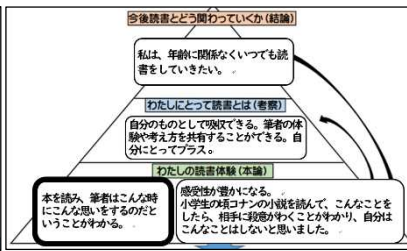
まず、抽出生徒において、思考ツールを活用することによって情報を整理することができたか、つまり、自分の考えや、根拠となる二つの体験、二つの体験の共通点を書くことができたかを検証する。そのために、生徒L、M、Nのワークシートを比較する。

生徒Lは、自分の考え(上段)、自分の考えの根拠となる体験(下段)、体験の共通点(中段)の全てを書くことができている(次頁資料3)。生徒Mは、自分の考えや共通点は書けているが、体験

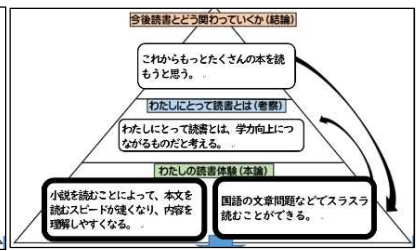
の一つを「本を読み、筆者はこんなときにこんな思いをするのだということがわかる」と書いている。これは、生徒M独自の体験とは言えないので、体験の内容が一部書けていないと判断した(資料4の□)。生徒Nは、生徒M同様に、自分の考えや共通点は書けているが、根拠となる体験の内容が、生徒N独自の体験ではなく一般論であるため、体験が書けていないと判断した(資料5の□)。



資料3 生徒Lの思考ツール



資料4 生徒Mの思考ツール



資料5 生徒Nの思考ツール

次に、授業を行ったクラス全体の生徒において、思考ツールを活用することによって自分の考えや自分の考えの根拠となる体験、体験の共通点などの情報を整理することができたかを検証する。ただし、共通点に関して、体験と一般論を書いている生徒(△)でも、その二つの内容の共通点を書くことができてきている場合は○とする。

表1 検証授業後期 思考ツール(ピラミッドチャート)の分析結果 (学級全体)

グループ		ア										イ			ウ					エ							
生徒		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	L	12	13	M	14	15	16	17	18	19	N	20	21	22	23
思考ツール	① 自分の考え(上段)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	② 根拠となる体験(下段)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	○	△	△	△	△	○	/	△	○	/	○
	③ 体験の共通点(中段)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	○	○	○	○	△
	① ○…書くことができています	—…空欄																									
	② ○…体験を二つ以上書くことができています	△…体験と一般論を一つずつ書いている											/…一般論を二つ書いている														
	③ ○…書くことができています	△…体験の片方の内容しか満たしていない											—…空欄														

表1をグラフにした図6を見ると、65.4%の生徒が根拠となる体験を二つ以上書くことができています。体験を一つ書くことができた生徒(△)と合わせると、9割以上の生徒が根拠となる体験を書くことができています。また、体験の共通点を書けた生徒は、8割を超えています。情報の具体化、抽象化ができた生徒の割合が高かった要因として、二つ考えられる。一つ目は、複数ある思考ツールの中から、ピラミッドチャートを選択したことである。ピラミッドチャートは集めた情報を抽象化して主張へと導く働きがある。「わたしの読書体験(本論)」のように、集める情報を明記したことで、何を書けばよいのか見通しをもって学習活動に、取り組むことができたのだと考える。二つ目は、学習活動に入る前に、スライド資料(p.4図4)で共通点のモデル文や、独自の体験と判断するポイントを示したことである。そこでは、共通点のモデル文として「わたしにとって読書は○○だと考える。」等を示した。また、独自の体験と判断するポイントとして、「過去形または現在進行形の文」と示した。これらを示すことによって、生徒は自分の考えを、文として表現することが容易になったのだと考える。

これらのことから、思考ツールを活用することは、自分の考えや自分の考えの根拠となる体験、体験の共通点などの情報を整理する手立てとして有効であったと言え

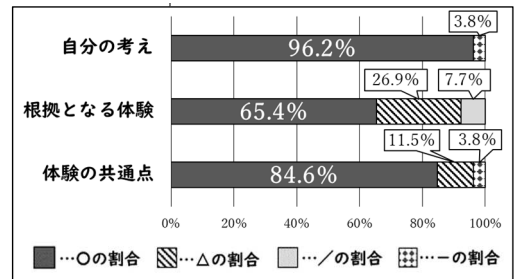


図6 思考ツールの分析結果

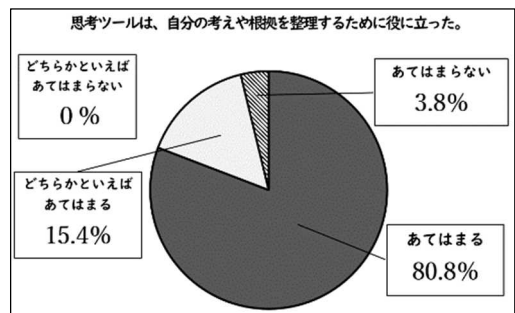


図7 事後アンケートの結果(思考ツール)

る。また、検証授業終了後に行った事後アンケートの結果では、「思考ツールは、自分の考えや根拠を整理するために役に立った」という質問に対して、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒の割合が96.2%だったことから、思考ツールの有効性が確認できた(前頁図7)。

イ 【検証の視点Ⅱ】 帰納論理に基づく5段落構成の型を活用することは、段落の構成や内容を検討して論理的な文章を書くための手立てとして有効であったか。

本実践では、帰納論理に基づく5段落構成の型を活用して、段落の構成や内容を検討することが、自分の考えを読み手に分かりやすく伝える論理的な文章を書くことにつながると捉え、検証する。検証の方法として、帰納論理に基づく5段落構成の型に、必要な情報を記入しているかを分析した。まず、抽出生徒の記述内容の検証結果を示す。

⑤	④	③	②	①	⑤	④	③	②	①	⑤	④	③	②	①
結論	考察	本論2	本論1	序論	結論	考察	本論2	本論1	序論	結論	考察	本論2	本論1	序論
自分の考え	の本論1、2	返生自撰 5段落構成 で2本検証	返生自撰 5段落構成 で2本検証	この型 が合う	自分の考え	の本論1、2	返生自撰 5段落構成 で2本検証	返生自撰 5段落構成 で1本検証	この型 が合う	自分の考え	の本論1、2	返生自撰 5段落構成 で2本検証	返生自撰 5段落構成 で2本検証	この型 が合う
うとど思 うとど思 うとど思	人生にお いて有利 になるも の。	たたくさ ん学ばな ることで き、	テストな どに、難 しい言葉 が出てき ても悩ま ずに、次 の文につ づけるこ とが、ス ピードア ップでき た。	キーワード 「理解に ついて」 具体的な 内容を	私は、年 齢に関係 なくいつ でも読書 をしてい きたい。	自分の考 えを、参 考に、 相手の感 情を考察 することが できる。	キーワード 「感受性 について」 具体的な 内容を	ぼくは、 読書をし ると著者 の体験が 考え方を 自分と重 ねることが できた。	年齢に関 係なくいつ でも読書 をするべ きだと著 者が著目 に多い。	わたした ちにとって 読書とは、 学力向上 につながる ものだと思 える。	この型 が合う	返生自撰 5段落構成 で2本検証	返生自撰 5段落構成 で2本検証	この型 が合う

資料6 生徒Lの型

資料7 生徒Mの型

資料8 生徒Nの型

生徒Lは、本論1の内容が独自の体験とは判断することができない内容(一般論)となっている。しかし、キーワードの欄には、本論1に書こうと考えている内容を抽象化して、「理解について」と書くことができている(資料6の□)。生徒Mに関しても、生徒Lと同様に、本論2の内容が一般論となっているが、キーワードに「感受性について」と書いていることから、本論2に書こうと考えている内容を抽象化することができていると言える(資料7の□)。生徒Nは、本論1、2に書いている内容が、どちらも一般論となっており、キーワードも書くことができていない(資料8の□)。生徒L、Mにおいては、本論のキーワードに注目すれば5段落構成になっている。しかし、本論の具体的内容に修正すべき箇所があるということが分かる。生徒Nにおいては、本論1、2の一般論を独自の体験に修正することで、より説得力のある段落の構成、内容となる。生徒L、M、Nに共通することは、思考ツールで整理した自分の考えや自分の考えの根拠となる体験、体験の共通点などの情報を、型に当てはめることができているということである。視覚的に必要な情報を整理したことが、段落の構成や内容を検討する際に生かすことができたと考えられる。

次に、授業を行ったクラス全体の生徒において、5段落構成の型を活用して、段落の構成や内容を検討することができたかを検証する。

表2 検証授業後期 型の分析結果(学級全体)

グループ	ア											イ				ウ					エ						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	L	12	13	M	14	15	16	17	18	19	N	20	21	22	23	
④ 序論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤ 本論1、2のキーワード	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	△	○	○	○	○	○	○
⑥ 本論1、2の具体的内容	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	△	△	△	○	/	/	○	○	○	○
⑦ 本論の共通点	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△
⑧ 結論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④、⑧	○…書くことができています											—…空欄															
⑤	○…書くことができています											△…本論1、2のどちらか片方を書くことができています				—…空欄											
⑥	○…書くことができています											△…本論1、2のどちらか片方を書くことができています				/…一般論を二つ書いている					—…文が途中で終わっている						
⑦	○…書くことができています											△…本論1、2の片方の内容しか満たしていない				—…空欄											

表2をグラフ化した次頁図8を見ると、序論にグラフから読み取った事実を書くことができた生



徒の割合と、結論に自分の考えを書くことができた生徒の割合は9割を超えている。

帰納論理に基づく5段落構成とするためには、本論1、2の具体的内容に独自の体験を書いていることと、考察に独自の体験の共通点を書いていることが重要である。本論1、2を見ると、約7割の生徒が独自の体験を書くことができています。また、考察では、約8割の生徒が本論1、2の共通点を書くことができています。これらの結果から、5段落構成の型を活用することは、段落の構成や内容を検討して、論理的な文章を書くための手立てとして有効だということができる。

また、事後アンケートの結果では、「型は、段落の構成や内容を検討するために役に立った」という質問に対して、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒の割合が96.2%となっている(図9)。この結果は、段落の構成や内容を検討するための手立てとしての有効性を示す要素の一つだということができるだろう。

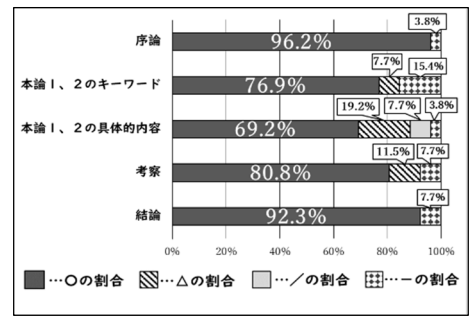


図8 型の分析結果

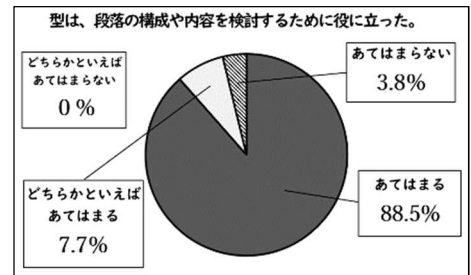


図9 事後アンケートの結果(型)

ウ 【検証の視点Ⅲ】段落の構成や内容を検討して、論理的な文章を書くことができたか。

思考ツールと型を活用したあと、実際に抽出生徒が書いた小論文を示す。

も役立っ  
今後、十代のうちに本をたくさん読みとて  
において有利になるものだと考える。  
読書は、私にたくさん本の学びを与え、人生  
移るようになって高得点に繋がった。  
新しい言葉が出てきても悩むことなく次の文に  
えスピードも速くなった。テストのときに難  
まて言葉のレパートリーが少なくても読む  
スピードが遅かったのが、レパートリーが増  
い言葉が出てきても悩むことなく次の文に  
移るようになって高得点に繋がった。  
読書は、私にたくさん本の学びを与え、人生  
において有利になるものだと考える。  
今後、十代のうちに本をたくさん読みとて

資料9 生徒Lの作品(小論文)

と関わっていききたい。  
今後、私は、年齢に関係なくいつでも読書  
のものであり、筆者の体験や考え方を自分  
私にとつて読書とは、自分にとつて役立つ  
事から、自分には殺意が生まれるような  
事から、本を読み筆者の考え方を参考に、相  
手の感情を考察することができるようになっ  
た。  
ことまじいたら、相手に殺意が生まれるか  
どうするかを考えると、自分の立場に置き換  
どを、自分の立場に置き換えて、自分だったら  
筆者の体験や考え方を、自分と重ねるこ  
とができなかった。そして、筆者の体験や考  
えが、自分のあいた時間に物語文を読み、  
私には、自分のあいた時間に物語文を読み、  
いうことが読み取れる人が二番目に多いと  
すべきだと思っている人が二番目に多いと  
をすべしだと思っている人が二番目に多いと

資料10 生徒Mの作品(小論文)

生徒L、M、Nに共通することは、型の段階では本論に一般論を書いていたが、完成した小論文では、読書に関する独自の体験を書くことができていたということである(資料9、10、11の口)。このことから、帰納論理に基づく論理的な文章の条件を満たした文章を書くことができていたと判断できる。生徒Nの小論文は、各本論の長さがほかの抽出生徒の各本論と比べると短い。しかし、段落の構成や内容を見ると、帰納論理に基づく5段落構成となっているため、最終的な作品としては、論理的な小論文を書くことができていたと判断した。

う。  
が、これからはもっとたくさん本を読もうと思  
くわたしにとつて読書とは、学力向上につな  
ら読むことができ、物事の内容も理解しやす  
文章問題を解いていくときに、本文をスラス  
ラ読むことができて、物事の内容も理解しやす  
なつて、国語の成績が上がった。  
わたり、国語の成績が上がった。  
が、これからはもっとたくさん本を読もうと思  
う。

資料11 生徒Nの作品(小論文)



次に、クラス全員の小論文を分析した結果を表3に示す。

表3 検証授業後期 小論文の分析結果 (学級全体)

グループ		ア										イ				ウ					エ						
生徒		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	L	12	13	M	14	15	16	17	18	19	N	20	21	22	23
小論文	⑨ 序論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	⑩ 本論1、2 (独自の体験)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	⑪ 考察 (本論の共通点)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△
	⑫ 結論	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	⑬ 一貫性のある5段落構成になっている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

○…書くことができている    △…本論の片方の内容しか満たしていない    /…一般論を二つ書いている    -…5段落構成になっていない

表3をグラフ化した図10を段落別に見ると、序論と結論は100%となっている。本論1、2の値を見ると、96.1%の生徒が本論に独自の体験を書くことができている。また、考察においても、92.3%の生徒が、本論の共通点を抽象的に書くことができている。一貫性のある5段落構成で小論文を書くことができた生徒は88.5%であった。このことから、生徒の多くは、段落の構成や内容を検討して、論理的な文章を書くことができたと言える。また、学習計画表の振り返りには、単元を通して学んだことを生かせる場面として「短時間で必要なことだけを取り出して人に伝えるときに生かせる」「人前などでプレゼンしたりするときなど、口頭で論理的に話すときにつながる」などの記述が数名の生徒から見られた。このことから、多くの生徒が論理的な文章を書くことができただけでなく、身に付けた資質・能力を書くこと以外の場面で生かすことができることに気付いた生徒が見られたので、本実践は、他領域への学習の広がりにもつながる可能性を示したと言える。

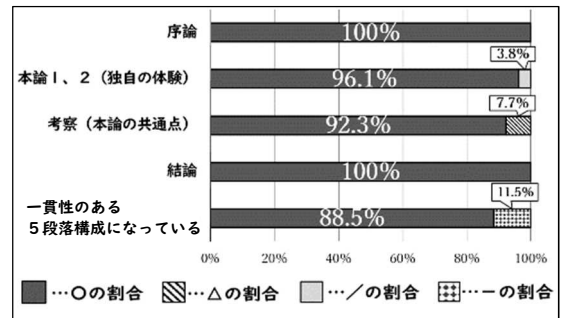


図10 作品 (小論文) の分析結果

検証の最後に、試案授業と検証授業後期の、生徒の作品の分析結果をまとめる (表4)。

表4 試案授業と検証授業後期 作品 (意見文、小論文) の分析結果 (学級全体)

グループ		ア										イ				ウ					エ						
生徒		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	L	12	13	M	14	15	16	17	18	19	N	20	21	22	23
作品	⑭ 試案授業の結果	○	△	△	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	-	△	△	△	○	○	○	-	△	△	△	△	○
	⑮ 検証授業後期の結果	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

⑭ ○…序論・本論・結論で書くことができている。 △…序論・本論・結論で書くことができていない    -…文章を書き終えていない  
⑮ ○…5段落構成で書くことができている    △…本論の片方の内容しか満たしていない    /…一般論を二つ書いている    -…5段落構成になっていない

試案授業では意見文を書かせた。その際、「相手に分かりやすく伝えるように」とだけ指示を出した結果、既習事項を生かして序論、本論、結論の構成で書いた生徒は26.9%だった (図11)。検証授業後期では、88.5%の生徒が帰納論理に基づく5段落構成で、論理的な文章を書くことができていた。このように値が増加した要因として、生徒が5段落構成を理解し、型を活用することができるようになってきたと考えられる。そのほかに、授業終了後にワークシートを回収して生徒の記述を確認し、付箋紙に「改善すべきところ」や「よく書けているところ」などを教師が記入して貼り付け、その日のうちに生徒に返却したことが、値が増加した要因として考えられる。この手立てを行ったことで、生徒は次時までワークシートの内容を改善させることができたのだと考えられる。実際、前頁図8 (型) と図10 (小論文) を比較すると、全てにおいて値が増加していることから、教師の助言を参考に生徒が自己の学びを調整したと考えることができる。つまり、本実践を通して、論理的な文章を書く力を身に付けさせるためには、思考ツールや型のような手立て

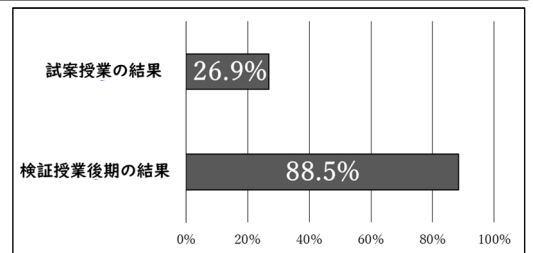


図11 作品 (意見文、小論文) の分析結果

が効果的だということのほか、授業終了後に生徒のワークシートを確認し、助言等を書き込んで返却するような、授業と授業をつなぐ手立ても効果的だということが分かった。

## 8 教育実践のまとめと今後の課題

### (1) 教育実践のまとめ

抽象化と具体化を取り扱うことができる思考ツールを活用することで、生徒は自分の考えや、自分の考えの根拠となる体験、体験の共通点などの情報を整理することができた。また、整理した情報を、帰納論理に基づく5段落構成の型を活用して段落の構成や内容を検討することによって、最終的に、論理的な文章を書く力を養うことにつながった。

### (2) 今後の課題

- ・ 論理的な文章となっているか、生徒自身や生徒相互で確認し合うことができる手立ての工夫
- ・ 国語科の他領域における手立ての有効性の検証

### 《引用文献》

- (1)(2)(10) 長谷川 祥子 『中学校国語科クラス全員が必ず書けるようになる指導技術』  
2020年 明治図書 p.21、p.24、p.44
- (3) 高木 展郎 『国語教育指導用語辞典(第五版)』 2018年 教育出版 p.69
- (4) 富山 哲也 『中学校新学習指導要領の展開国語編』 2017年 明治図書  
p.22
- (5) 波頭 亮 『思考・論理・分析「正しく考え、正しくわかること」の理論と  
実践』 2021年 産業能率大学出版部 p.93
- (6) 井上 尚美 『国語教育指導用語辞典(第五版)』 2018年 教育出版 p.294
- (7)(8) 田村 学・黒上 晴夫 『こうすれば考える力がつく!中学校思考ツール』 2014年  
小学館 p.13、p.18
- (9) 市毛 勝雄 『早稲田大学国語教育研究』 1998年 早稲田大学国語教育学会  
p.14

### 《参考文献》

- ・ 文部科学省 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』 平成30年  
東洋館出版社
- ・ 井上 尚美・大内 善一・中村 敦雄・山室 和也 『論理的思考を鍛える国語科授業方略【中学校編】』 平成24年 溪水社
- ・ 高木 展郎 『平成29年度改訂中学校教育課程実践講座国語』 2017年 ぎょうせい
- ・ 田村 学 『学習評価』 2021年 東洋館出版社
- ・ 田中 耕治 『よくわかる教育評価』 2021年 ミネルヴァ書房
- ・ 益地 憲一 『「感性的思考」と「論理的思考」を生かした「ことばを磨き合う」授業づくり』  
2020年 明治図書出版
- ・ 甲斐 睦朗 ほか 『国語3』 令和4年 光村図書出版株式会社
- ・ 佐賀県教育センター 『令和2年度プロジェクト研究中学校国語科「根拠を明確にして意見を書こう」』  
<https://www.saga-ed.jp/2020/04/01/r2-cyu-kokugo/>
- ・ 文化庁 『平成30年度「国語に関する世論調査」の結果の概要』  
[https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/kokugo\\_yoronchosa/pdf/r1393038\\_02.pdf](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/r1393038_02.pdf)